

遠藤文学における女性（三）

——「わたしが・棄てた・女」に流れ込んでいくもの——

笛 木 美 佳

一

遠藤周作の代表作「沈黙」（昭41・3）には〈惑星〉があった。『哀歌』としてまとめられる諸短編である。

ある時期から、私はひとつの純文学長篇を三年か、四年かの間隔において発表することになっていた。／そしてその三年か、四年の間が私にとっていわゆる長篇のための準備と蓄電の期間であると同時にそれを模索する短篇を幾つか書くという方法をとった。／はじめてこのような方法を自分に課したのは長い病院生活がすんで、いよいよ病中で考えていた素材を長篇にしようとした時である。／（中略）この長篇を心のなかで固めていくために、太陽をまわる惑星のような短篇を幾つか書くことにした。／それらの短篇を集めたのがこの「哀歌」である。／だから「哀歌」を私の「沈黙」の前奏曲、と考えてくださってよい。

（著者から読者へ「哀歌」の思い出⁽¹⁾）

そうした「方法を自分に課した」のは「沈黙」からとしても、「沈黙」

以前の代表作の一つである「わたしが・棄てた・女」（「主婦の友」昭38・1512）にもそのような〈惑星〉・〈前奏曲〉があるのではないか。というのは、「わたしが・棄てた・女」発表に先立つ予告⁽²⁾において編集者が「とくに、「主婦の友」のためには、想を練ること二年有余、充分の用意をもって、会心の筆をとられることになりました」と紹介していることに加え、熊井啓・上総英郎「深い河の向こうへ」⁽³⁾において熊井氏が、「順子夫人のお話だと、遠藤さんはそれ（引用者注「わたしが・棄てた・女」の森田ミツのモデルとされる井深八重の献身の生涯について）を留学時代もずっとあたためておられたそうです」とコメントしており、決して場当たりに書かれた作品ではないことが明かされているからである。遠藤自身も森田ミツを「理想の女性」⁽⁴⁾と述べ、その後も、間を置きつつ、彼の作品の中で繰り返し登場させている⁽⁵⁾。

森田ミツはどのように「あたため」られ、生み出されてきたのか、どのようなところが「理想」なのか、以下、「わたしが・棄てた・女」に流れ込んでいるものを追いかけてみたい。

「わたしが・棄てた・女」に流れ込んでいるものを追っていったところ、昭和三十五年の肺結核再発の前後で様相が異なることに気づかされた。そこで、まず、再発前の状況を明らかにしていきたい。

〔昭和二十九年〕

この年は、処女作「アデンまで」(『三田文学』昭29・11)が発表されたが、ここには表現上も主題上もとくに流れ込んでいるものは認められなかった。

〔昭和三十年〕

「白い人」(『近代文学』昭30・5、6)において〈私〉に棄てられるマリ・テレーズが登場する。彼女は「お世辞にも綺麗とはいえず」、「栗色の髪をおさげにして十四、五の少女のように肩にたらしめて」いる点は森田ミツに類似するが、「やせこけた体」である点、「形のいい若鹿のように伸びきった脚」「目にしみるほど真白い太腿」によって〈私〉のコンプレックスを刺激し、裏切っていく点でミツとは全く異なる。さらに、自己犠牲の道を進んだのは彼女ではなく、従兄のジャックである(マキ団に所属していたジャックは、ナチの拷問にかけられた折、マリ・テレーズと仲間を守るために神学生でありながら自殺の大罪を犯して、口を閉ざした)。

「黄色い人」(『群像』昭30・11)には、千葉が「ただ、動きたくないため、これ以上身じろがぬために」「仁川に帰ってきた」のに、「わずか二カ月しかならぬ間に、幾人かの人の人生が石を洗う流れのように」彼のために

「濡らされたり、形を変えたりしている」ことを思うという場面が見られる。これは「わたしが・棄てた・女」に見られる〈痕跡〉と通じるが、ここでは感懐に終わっており、これ以上主題に結びついて発展することはない。

〔昭和三十一年〕

「青い小さな葡萄」(『文学界』昭31・1〜6)には表現に受け継がれていくものも、ミツの人物造形に活かされたであろうものも登場している。

まず、表現であるが、同じ戦争犯罪人でもドイツ人のハンツの場合は「白人同士だから」もう少ししたてば「罪は忘れられ手品のように消えてしまふ」と、黄色人であり日本人の伊原が「皮肉な調子で」言ったのに対し、ハンツは、戦争の傷は深く簡単にはすまない」と反論し、言い争いになる。

伊原は火照った頬に雨が小さな針のように刺してくるのを感じていた。だまたま彼が歩きはじめると、ハンツは雨にぬれた鞆をもち、仔犬のように伊原のあとをついてきた。(傍線引用者)

このあと、伊原はハンツをコサック亭に連れて行き、彼からスザンヌ・パストルと青い小さな葡萄の話聞く。「わたしが・棄てた・女」でもミツとの関わりにおいて、吉岡はしばしば雨にみまわれるのだが、パチンコ屋の女の子から、さらに転落したミツの人生を聞いた後の場面は、次のように描かれている。

酒場の名と場所とをきいて、ぼくは路に出た。首すじと顔とに細かい針のような雨があたってきた。(中略)／そうだ。ぼくはその時、がらにもなく妙に感傷的になっていた。今までそれほどふかく思いもしなかったあいつの人

生を、霧雨のなか、頬や首をぬらしながら、指をかみながらぼくは考えた。

どちらも後ろめたい思いをし、ふと立ち止まって今まで見過ごしていたことを考えるきっかけを得た時の雨である。この「針のような雨」は登場人物の心の奥にまで突き刺さるものとして降るのである。

マキ団に所属し、抗独運動に加わっているながら、負傷したドイツ兵ハンツに薬と青い小さな葡萄を与え、それ故におそらく処刑されたであろうフランス人スザンヌ・パストルの献身的行為は、困っている人、苦しんでいる人を見ると放っておけないという森田ミツの人物造形に活かされていると考えられる。このマキ団の内部処罰の実態こそ、遠藤が留學時代に初めて知ったことであり、前掲熊井氏の「留學時代もずっとあたたためて」⁽⁶⁾という言とも関係するのではないか。遠藤は「わたしが・棄てた・女」に先立って、「聖書のなかの女性たち」(「婦人画報」昭33・4・34・5、のち昭35・12刊行)にヴェロニカを紹介しているが、ここにも抗独運動の力に屈せず、献身的な行為をした女性を挙げている。まず、ヴェロニカは、キリストが処刑されるために重い十字架を背負って度々倒れながら歩いているのを見て、「胸のしめつけられるような烈しい憐憫の情」にかられて、その顔を布で拭う女性である。後で見るとその布にはキリストの顔が写されていたのである。遠藤は「ヴェロニカの小さな存在は、社会や群衆がどんなに墮落しても、人間の中にはなお信頼できるやさしい人のいることをぼくたちに教えてくれる」とコメントし、続けて「五年前、フランスに留學している時」、「アルデッシュという南仏にちかい山国の中で」聞いたとして、「フランス人の抗独運動者たちと戦って傷ついた一人のドイツ兵」を、「どうにもならぬ憐憫」を抱いたフランスの「百姓の内儀さん」がかくま

った話を書いている。発見した村の青年たちはドイツ兵を私刑に、「内儀さん」も「フランスを裏切った女」と罵りながら殺してしまった」というのである。それについて遠藤は、「ヴェロニカはここにもいる——女性の心が男性の作った社会モラルや政治モラルをこえてもっと高く、美しく赫くのは、こういう場合でしょう」としており、苦しむ人への「憐憫」から我を忘れて手助けする女性に強く感銘を受けている様子がうかがえるのである。

ただし、スザンヌは「やせこけたゴツゴツした娘」で、マキ団に所属している活動的な女性である点、「背のひくい小ぶとりの女の子」で、平凡な田舎娘であるミツとは、外見上はまだ遠い。

〔昭和三十二年〕

「パロディ」(「群像」昭32・10)に「雨の降っている日に、陽のあたる風景を想像するように」という表現が見られる。これは「わたしが・棄てた・女」の「ぼくの手記(五)」で吉岡努がソープの女の子からミツのその後の状況を聞く場面で、「ミツがぼくのことを忘れていないということは、こちらの自尊心をゆさぶったが」、「彼女にすまないと思う気は起き」ず、「むしろ、迷惑な荷物を押しつけられたような感じだった。そして雨がふる日に、遠くむこうだけが晴れている山並をみるような感覚で、ぼくはミツのことを考えた」という表現として、また「手の首のアザ(二)」でミツが看護婦の一言によってハンセン病が癩病であることを知って、打ちのめされた場面、「信じられない、自分がそんな病気だとは信じられない。雨の日に向うだけ晴れている丘陵の存在を眺めるようなうつろな気持だ」という表現として活かされていく。この雨と晴れの対比は、きびしく、不

都合な現実を前に、人ごととして直視を避ける心情を表す常套表現として遠藤文学の中に根付いていくものである。

また、この年には「海と毒薬」(『文学界』昭32・6、8、10)が連載された。この作品には二人の「ミツ」が登場する。佐野ミツと阿部ミツである。佐野ミツは佐賀出身で、戸田が「小さな家を借り」た時に女中となったが、妊娠し、戸田によって墮胎処置をほどこされ、田舎に返される女性である。この棄てられるという状況、「三等車がすべりだした時」「いつまでも窓に小さな顔を押し当て」ていたその眼が戸田の罪を突くという状況は、「わたしは・棄てた・女」における、森田ミツを渋谷の駅で棄てた吉岡の状況と非常によく似る。電車の中でマリ子と相思であることを確認し、「自尊心の悦び」に浸っていた吉岡は、渋谷を通りかかった時、突然ミツのイメージを思い出し、心を「針のように刺」される。そして駅で乗降する人々の姿に「かつて同じホームで電車に追いすがるように追いかけてきたミツの顔をぼんやりと心に甦ら」す。また、マリ子の代わりに欲望を満たす相手としてミツを川崎の喫茶店に呼び出した時も、自身の病気を知って、再会を拒んで扉の所に立ち、「食い入るように」「見つめた」ミツの眼に、「渋谷駅のホームでドアがしまり、走りだした電車の中のぼくを小走りに走りながら必死でさがしていたあの時の眼」を思い出している。

戸田の場合は、良心を突かれても痛みを感じない冷めた心を象徴する例として佐野ミツの目が活かされ、吉岡の場合はその時によって良心の痛みを感じたり、エゴに突き進んだりと眼の活かされ方は異なる。が、男が非情に女と関係を絶つ手段として電車(汽車)を使い、引き裂かれた女のすがらような眼を良心の問題に絡めていく手法はよく似る。広石廉二氏は『わたしは・棄てた・女』——真の聖女とは何か⁽⁷⁾において、「恐らく遠

藤氏はこの戸田に棄てられた佐野ミツという女に、森田ミツのイメージを重ね合わせて書いたのであろう」と指摘しているが、肯ける意見である。

もう一人の「ミツ」、阿部ミツも看過できない。この女性は、勝呂たちの病院に入院しているのだが、みなが施療患者として蔑視するおばはんに対し、差別することなく世話をしている。おばはんの代弁者となり、子ども向けの「仏さまの本」を読んだり、戦地の息子のために日章旗に寄せ書きを集めたり、最後にはおばはんの死も看取ってやる。そして、おばはんの死後、同じ施療ベッドに入った老人にも本を読んでやり、「あんたもあの先生に、よう、相談しなさいよ。前にそこに寝とった人もだいたい助けてもらいましたもんなあ」と勝呂への全幅の信頼を表す。この場面は、捕虜に麻酔をかけるところまで生体解剖が進行し、勝呂は実際に手を下さないもののその場に居合わせたことで、戸田から「俺たちと同じ運命を」「半分は通りすぎたんやで」といわれた直後に挿入されている。この阿部ミツの言葉は、直接勝呂が聞くことはないが、勝呂の罪を際立たせるものとして効果的である。さらに、勝呂は生体解剖終了後、発熱した老人の診察をするが、そこでもミツは「あんたもう大丈夫たい。先生にみんな、まかせときなさいよ」と老人に声をかけ、勝呂にも「先生、助けてやってつかあさいよ」と呟くのである。生体解剖のことを何も知らないこのミツの絶対の信頼は、罪を犯した勝呂に重く響く。疑うことなく、人間を信じる善良さは森田ミツに通じ、その善良さが、犯した罪を鋭く突くという設定も、森田ミツと吉岡の關係に生きていよう。ただし、この阿部ミツは息子を戦争に行かせているおばはんと同年齢に近い人物であり、まだ森田ミツの原型とまではいえない。

〔昭和三十三年〕

この年、小説は複数執筆しているが、特筆すべきものはない。「挿話」〔小説公園〕昭33・3、のちに「恋人とよばせて」に改題）の中に、「若い娘が背伸びをしながら洗濯物を竿にかけているところ」を盗み見る男子学生たちが、その娘の「白いふくらはぎを眩暈でもしたように見つめ」という表現が、「わたしが・棄てた・女」における長島繁男の子ども時代の回想、葡萄摘みの若い娘たちの「真白い膝小僧」への憧れに繋がっていることを指摘できる程度である。

しかし、エッセイにおいては「聖書のなかの女性たち」(昭33・4～34・5)が連載され、多くのものが「わたしが・棄てた・女」に流れ込んでいった(ただし、ここでは連載された分を対象とし、昭和三十五年十二月刊行時に付け加えられた、「聖書のなかの女性たち」「エルサレム」「秋の日記」については後で考察する)。

先にも挙げた「ヴェロニカ」(昭33・5)では苦しんでいる人への「憐憫」に我を忘れて手をさしのべる人間の愛を語っている。「聖母マリア——カナの奇蹟」(昭34・4、単行本題「聖母マリアⅢ」)では、カナの奇蹟は「水を葡萄酒にかえた」、「つまりあるものをより立派なものに変化させたということ」で、「低い人間性」を「より高い人間性」に変化させるキリスト教にとっては重大な意味をもっている」とまず指摘する。その上で、その水を葡萄酒にかえることを「頼んだのがほかならぬマリアであった点」に着目し、「マリアは一人の女性であり、女性の象徴ですが、男のもつ低い人間性をより高く変化させていく女性の役割」を担っており、この「マリアが永遠の女性の象徴として西欧人に考えられるのは決して理由のないことではありません」と述べている。この二つの章に描かれた女性観は、

「誰か他人がミジメで、辛がっているのを見ると、すぐ同情して」「自分のことなどすっかり忘れて、そのミジメな相手を懸命に慰めようとする」森田ミツの生き方として、また〈痕跡〉を通して吉岡に「長い時間をかけて人生や神について考えさせ、

ぼくはあの時、神さまなどは信じていなかったが、もし、神というものがあるならば、その神はこうしたつまらぬ、ありきたりの日常の偶然によって彼が存在することを、人間にみせたのかもしれない。理想の女というものが現代にあるとは誰も信じないが、ぼくは今あの女を聖女だと思っている……。

と、手記に書かせるにいたる森田ミツのあり方に、ダイレクトに流れ込んでいると言えよう。

また、「病める女」(昭33・6)では血漏を患う女が紹介される。「群衆の中から、そっと自分の衣に触れる弱々しい指を感じ」、「その指を通してキリストは十二年も長血を患った女の哀しみをすべて知り」、「彼女を決して孤独にはしなかった」という話を通して、病のため孤独で寂しい夜を過ごしている「貴方の苦しみは今夜、別の多くの病氣の人々につながり理解されている筈です」とした上で、「我々を他人に結びつけるものは幸福や喜びを共にすることだけではない。苦しみを分かちあう時にも、人間は手を握りあうのです。貴方は決して一人ぼっちではない……」と語りかける。この苦しみの連帯は、「わたしが・棄てた・女」において、ミツが田口さんの奥さんの窮状を見捨てて、黄色いカーディガンを買いに走ろうとするのを立ち止まらせた、「一つのくたびれた顔」の「囁」き、「この人生で必要なのはお前の悲しみを他人の悲しみに結びあわすことなのだ」という言葉や、ハンセン病の復活院療養所でスール・山形がミツに説明する、「不

幸な人の間にはお互いが不幸という結びつきができ、「たがいの苦しさ」と悲しみを分けあっている」という言葉において再現されている。特に後者の場面では「ミツこそ、今日まで他人の不幸をみると、その上に自分の不幸を重ねあわせ、手を差しのべようとする娘だったのだ」とされており、後にスール・山形によって「わざとらしさが少しも見えな」い「愛徳の行為」として高く賞賛されることとなっている。ミツの人物像における核となる部分がここに見出されるのである。

さらに、「聖書のなかの女性たち」には、自分は正しいと思い、他人の弱さや悲しみを理解せず、他人を裁き、独善性に陥る危険性の指摘が目につく。「一人の売春婦の話」(昭33・4、単行本題「一人の娼婦の話」)、「カヤパの女中」(昭33・7)にも表れているが、「マルタ」(昭33・10)を取りあげたい。マルタ姉妹の家をキリストが訪れ、マルタはもてなしの準備に大わらわであったが、妹のマリアはキリストの話に聞き入って手伝おうとしないので、マルタがキリストに愚痴をこぼしたという話である。ここで遠藤は、マルタのような「家庭や自らの人生(夫や子供)をみごとに秩序だて整理する立派な能力をもった女性たち」は「自分が正しい立派な女性である(少なくともそうなるべきという)気持から、罪の泥沼に陥った人を軽蔑し、拒絶する心が生れて」くるとし、「妹を裁くだけで妹の心を理解し共感してやらなかった」彼女の愛の欠如を挙げ、「その立派さ、しっかりさが自分だけの独善性を人生の中にみちびき入れはしないか」と非難している。さらにこの独善性の危険は「聖母マリアIV」(昭34・5)でも「自分を正しい心の立派な人間と思い、他人の過ちや罪を蔑むこと——キリストはこれをもっとも嫌った」のであって、「自分も他人も同じように弱い人間であることを知り、そして他人の苦悩や哀しみにいつも共感すること、

これをキリストは聖書の中で「女性を通して」教えている」と繰り返される。「無邪気」で「幼児のごとき」人と評された森田ミツは、この独善から最も遠い存在であり、キリストが「聖書の中で「女性を通して」教えている」ことを実践している女性である。

〔昭和三十四年〕

この年は「火山」(「文学界」昭34・1〜10)が連載された。この作品は棄教神父の問題で取りあげられることが多いのだが、須田仁平の、家族からも見捨てられている苦痛・愛されない苦痛が、切実に語られている点にも注意したい。

赤岳の観測・研究一筋だった仁平は勤続十五年の表彰を受け、退官するが、その一週間ほど後に低血圧で倒れ、入院する。年末に一時退院が認められ、自宅に帰るのだが、大晦日の夜に息子夫婦が、自分を「厄介者」と思っている話を偶然聞いてしまい、それは「寂寥感」「孤独感」として彼の心にしこることになる。正月に観測所をぶらりと訪ねた仁平は、老いて噴火することはないと断言していた赤岳が、爆発の予兆を示していることを知って動揺する。「赤岳がお前を裏切ることはないか」と「呪文のように」「心のなかで呟」くが、「耳の底で」「大きな渦のような笑い声がひび」き、「(赤岳だけではなか……お前はみんなに見捨てられとる。見捨てられとる。見捨てられとる……)」と迫ってくるのである。

自分がなにをしたというのだ。社会では律儀に波ひとつたてぬように生きてきたし、家庭ではとくに悪い夫でも悪い父親でもなかった筈である。それなのに彼は、自分が誰も愛したことがなかったように、誰からも愛されたことのなかった事実を今、認めざるをえなかった。

「退官」した彼を、三が日に訪ねる者もない。「須田仁平は、もう世間から見捨てられてしまった存在にすぎなかった」のである。再び昏倒した仁平は夢に妻から見捨てられ、また息子夫婦の声を聞く。

孤独というものを一度も考えたことのない彼が、生れて一人ぼっちであることに気がついたのはこの瞬間だった。六十年の生涯の間、自分は心の底から愛した一人の人間もいなければ、一人の人間から愛されたこともなかった。

「もう一度、生きかえれるものなら」「生きかえって人生をやりなおしたい」と願うが、それもかなわず、亡くなるのである。

棄教神父、デュランの孤独も痛切である。心臓を病み、入院している彼を元同僚の佐藤銀蔵神父が見舞うが、その見舞いが「年に二、三度慈善とも憐憫ともつかぬ一種の義務感情から」、「気の進まぬ基督者としての義務感から」のものであることを佐藤神父自らが意識している。

「火山」は、皆が利己的で、真の愛の欠如した世界、役に立たない弱者を見捨てていく世界のわびしさを提示しているが、それをどう救うかという答えは、描かれていない。わずかにデュランが主任司祭をしていた頃の記憶として、「いわゆる街の女たちを更生させる施設」である「マグダレヤの家」を逃げ出した戸田花江が「どんなに苛められても男のそばで死んだ方がいいと叫ぶ」という強い愛が示されているが、当時のデュランも、連れ戻しに行った牧野修道女もそれを理解できなかった。ただ、今も思い出すことを考慮すると、今のデュランはそこに愛があったことを認めているのかもしれない。

ところで、この「火山」の愛の問題に答えたのが「最後の殉教者」（別冊文藝春秋「昭34・2」と「おバカさん」（朝日新聞夕刊「昭34・3・26」8・

15）ではないか。これら三作と、前年から連載されていた「聖書のなかの女性たち」の発表・連載時期が重なっていることに留意したい。⁽⁸⁾

具体的に見ていくと、「火山」連載第二回（昭34・2、現行Ⅱ）は佐藤神父のデュランへの善行が「義務からのもの」にすぎないこと、つまり弱者・罪びとへの無理解が描かれているのだが、同じ二月発表の「最後の殉教者」では、弱さゆえに神も仲間も裏切って棄教した喜助に対し、「わたしを裏切ってもよかよ。だが、みなのを追って行くだけは行きんさい」と言う「男の声でも女の声でもな」い声、弱者の苦しみに共感する存在が描かれている。

その同じ頃、「聖書のなかの女性たち」の連載では聖母マリアを続けて紹介していた（昭34・1～5の連載部分）ただし、三月は「ルルドの聖母」。特に「聖母マリアⅣ」（昭34・5）では、キリストが聖母マリアに最後に望んだのは「人々のくるしみや哀しみを共にわかち合うこと、そうしたくるしみや哀しみに共に涙をながすこと」であったとされている。「おバカさん」でも三月二十九日には、隆盛が巴絵に、イタリア映画「道」に登場する、どんなに虐げられても男についていくジェルスミーナという女性について「このせつない心が」「いつのまにか、美しい聖女にたかめていった」と話す。三月発表の「火山」（連載第三回、現行Ⅳ）でも愛に生きる女、戸田花江が描かれている。

さらに、「おバカさん」では五月三日に、ガストンが隆盛の家を出て星の下、歩いていく場面が描かれている。ここは、「いつも嘲笑されたり、ばかにされてきた」が、「人間を信じ」、「弱くて、悲しい者にも何か生きがいのある生き方ができないものだろうか」という、彼の心の秘密が明かされるところである。この「人間を信じた」という強い信念は、十日、

十四日にも重ねて描かれている。十六日は蝸亭老人が、今の日本に失われたものは「信ずることじゃ」とガストンに話す場面である。六月に入ると、ガストンは殺し屋遠藤に連れ回されているのだが、十四日には復讐に向かうと知りながらも、「(わたしですと……遠藤さん……かわいそう……)」と思うガストンが描かれ、二十三日には復讐を阻止され、憤ってコルト銃を向ける遠藤に「あなた捨てないこと……ついて行くこと」「これ、わたしの決心」と宣言するガストンがある。

その一方で七月発表の「火山」連載第七回(現行Ⅶ)では、仁平の、愛したことも愛されたこともないという孤独が痛切に描かれ、続く八月発表の「火山」連載第八回(現行Ⅷ)では仁平が見捨てられた存在であると意識する場面が、九月発表の「火山」連載第九回(現行Ⅸ)では妻からも見捨てられた夢を見た仁平が、取り返しの付かない無念を味わいつつ寂しく死んでいく場面が描かれている。

「おバカさん」の方は八月十五日に、ガストン失踪後、渋谷を訪れた隆盛が、女を占う蝸亭老人を電信柱のかけから「見つめて」、「女がどんな悩みをあの老人に訴えているのかはわからない。ガストンがいたならばこんな時、どんな身ぶりをするだろうと、彼は目をしばたたきながら煙草に火をつけた⁽⁹⁾」というところで終わりを迎える。

これら一連の創作状況から、遠藤の作品において、愛の模索が大きく前面に出てきていることがうかがえる。一方で愛のない世界のわびしさを描き、その一方で人間を信じ、愛を与える人物を描いて、日本における愛の形・現代における愛の形を探しているように思えるのである。

付け加えると、この頃の作品に特徴的に表れてきた言葉が〈平凡〉である。「聖書のなかの女性たち」では「聖母マリア(Ⅰ)」において、マリア

をも、「世界のどこにでもいる、目だたぬ家の、目だたぬ娘にすぎ」ず、「キリストが我々と同じように人生の苦しさ、惨めさを味わねばならぬ一人の平凡な庶民の娘を母親としてえらんだことを皆さまに考えて頂きたい」と説明し、その上で、この「我々と同じ弱い女性にすぎない」マリアが「人生や運命をそのまま受容するあのふしぎな力」をもっているところに、「特性の一つがある」としている。「おバカさん」のガストンも出自はナポレオンの末裔だが、ナポレオンとは似てもつかない「顔が馬のようで動作が緩慢」、「まるで幼児のような精神年齢」で「弱虫で意気地なし」という〈平凡〉な男、ダメ男である。が、隆盛をとりこにし、現実主義者の巴絵の評価も変えさせ、殺し屋遠藤までも改心させてしまう。翌年発表の「ヘチマくん」(「河北新報」他、昭35・6・2(12・22)の主人公豊臣鮒吉も、豊臣秀吉の末裔ながら、「顔といい、その風采といい、発音までふわんとして、あの夏の軒端にぶらさがったヘチマを連想させるに充分」という、気のよい〈平凡〉な人物である。しかし、全く見返りを期待せず、一途に鮎川典子を慕う純粋さが、利益第一の親友、熊坂までも変えてしまう。こうした〈平凡〉な人物たちが、殺伐とした利己主義中心の社会に愛を投げかけ、周囲の人に影響を与え、変えていくという主題は、そのまま「わたしが・棄てた・女」に流れ込んでいると言ってよい。

ただし、この頃の〈平凡〉な人物たちはみな男性である。そして、その愛の形は、殺し屋であっても見捨てないですつとつて行く、手の届かない他人の病妻ながら、見捨てないで贈り物に心を託し続けるという方法で示されている。人物設定は〈平凡〉ながら、その行為に〈特殊〉なものを含み込んでしまっていると言える。さらに、昭和三十六年十二月に刊行された『聖書のなかの女性たち』(角川書店)には連載時のものに加えて「秋

の日記」も入ったが、この中で遠藤は、ベルナノス『田舎司祭の日記』とモウリヤック『仔羊』の主人公がそれぞれ「凡庸」でありながら、小説の最後の頁において「私たちの及ばぬ地点」、「人生の崇高な部分を歩いている」、もしくは「秋の黄昏の光のような一条の光線」が「私たちの眼をうつ」という変容、「自己聖化」をなし遂げていることを説明した後で、次のように述べている。

私は『おバカさん』という作品でこのベルナノスの『田舎司祭の日記』やモウリヤックの『仔羊』に描かれた主人公をもっと一般的な形で書くようにした。

つまり、「おバカさん」も〈自己聖化〉を描くことが主目的だったのである。より〈平凡〉な愛の形・より身近な愛の形はいかなる方法で表せるか、この先も遠藤は求め続けるのである。

三

昭和三十五年四月に遠藤は肺結核の再発を見て、入院する。それとともに病院が舞台となる作品が増え、孤独や寂しさを慰めるものを求める心情、生死を前にしての嘘偽りのない不安が描かれるようになっていく。

以下、「わたしが・棄てた・女」誕生までの後半について考察する。

〔昭和三十五年〕

この年発表された中で、注目すべき作品が三作品ある。「集団就職」〔小説新潮〕昭35・6〕と「男と猿と」〔小説中央公論〕昭35・7臨増〕、「葡

萄」〔新潮〕昭35・7〕である。

「集団就職」は、新潟の中学卒業後、集団就職で漫画家玉置の家の女中になる、並河トシ子が主人公である。田舎出身の彼女は慣れない東京の言葉遣いに、四苦八苦しながら奉公生活が続ける。親友も奉公をやめて帰郷すると聞いたその夜、肺病にかかった主人の玉置から、「もし故郷にかえるなら帰っても勿論いい」と言われる。彼女は、「なにか旦那さまが気の毒という気持」と「そんな怖ろしい病気にかかるのはこわい」と思う気持ちに挟まれ悩むが、結局は玉置家に残ることに決める。主人の病は重く、手術をするが、途中でB型の血液が不足する。B型だった彼女は血液型確認検査でメスを当てただけでも「怖ろしさで体が震える感じ」を味わい、献血の途中で「気を失って」しまうが、彼女の提供した血液によって主人は救われる。

まず玉置家に残るという選択は、弱い者を見棄てないという行為であり、「ここにいても、ええですか」と、「泣きそうになりながら大声で叫ぶ」トシ子の姿には、御殿場駅から療養所に戻った時の森田ミツが「じゃ、あたしも患者の世話をする。ここで働いたら、いけないですか」と言った姿を重ねられる。また献血をするという行為は無私の愛であるが、「おバカさん」より身近なところで、愛の行為が行われたと言えるのではないか。こうした、夢中のうちに愛の行為を実践する女性像は「青い小さな葡萄」のスザンヌ・パストル、「聖書のなかの女性たち」のヴェロニカと通ずるところもあり、森田ミツの原型の一つと言ってよからう。ただし、並河トシ子は中学時代、二番の成績であったこと、献血のお礼に玉置夫婦から夜間高校に通わせることを提案されたことなど、森田ミツより高い知的レベルと好運を持っている。

七月発表の「男と猿と」は、リヨンの公園の、猿の檻の前での白痴の男と猿の不審な行動を偶然見た〈ぼく〉が、白痴の男の死後、日本に帰ってからその時の猿の行動が「ふかい友情の表現」であったことを知る、という話である。

あの猿とあの男とはあの公園で冬の一日、たがいに自分たちの孤独を訴え慰めあっていたのか。このだから愛されなかった二つの存在が冬の弱い光のなかで向き合って話をしていたことを、ぼくはその時知ったのだった。

この話において白痴の男と猿は共感しあい、悲しみの連帯を結んでいたことになる。愛とは特別な行為ではなく、弱者同士が共感しあうところに生まれるものであることを強く示していると言える。

同じ七月に発表された「葡萄」は、遠藤が機会あるごとに繰り返す語る、白血病で余命わずかの夫の手を、妻が握っているのを目撃する話である。主人公、立花はそこに「間もなく訪れてくる別離にどうすることもできない」無念を読み取るのだが、看護婦の体験談を聞いて、人間の心にある「連帯へのどうしようもない欲求」、「自分一人がくるしまねばならぬ孤独感、自分一人だけが苦痛を味っているくるしさ」が「掌を握られるだけで鎮まっていく」ことを知る。ここには、一見何の力も持たないような手を握るという行為によって、孤独・苦痛を分かち合い、連帯を結べるということ、大きな心の支えになりうるということ、つまりごく身近な愛の形が示されている。

これら三作品と並行して、先に挙げた「ヘチマくん」が連載されるのだが、この作品は「おバカさん」よりはドラマ性が薄れている。主人公は豊臣秀吉の末裔だが、日本人であるし、殺し屋も登場しない。無償の愛はも

ともとはひそかな恋心である。やはり、より〈平凡〉な形での愛の行為が追求されていると言ってよい。

以上、この年に発表された作品は、愛のテーマをより身近に、より〈平凡〉な方法で示すことを求めている様子がうかがえる。そして、そのキーワードとして〈共感〉〈連帯〉がクローズアップされるのである。この〈共感〉〈連帯〉への期待は、もちろん作者遠藤の病と無関係ではなからう。
〔昭和三十六年、三十七年〕

昭和三十六年、遠藤は一月に二回、肺の手術をして、六月に一時退院するが、九月に再発、再入院。十二月には三度目の大手術をした。

この年十二月には、先に連載された「聖書のなかの女性たち」に三つの章、「聖書のなかの女性たち」・「エルサレム」・「秋の日記」を付け加えて、『聖書のなかの女性たち』が刊行された。この「秋の日記」は「十月某日」の日付をもって書き付けられていく形式を取っている。矢代静一の「解説」によると、

この章は、作者が病床で綴った日記であり、むずかしい肺手術を受ける前の、いやでも死と向いあわざるを得なくなったときの、不安な状態の中で書き進められたものである。

とされており、連載当時とは異なる、この頃の遠藤の心境を読み取ることができる資料となっている。この中には、先に挙げた「おバカさん」の自己解説と共に、「葡萄」と重なる、白血病の夫とその手を握る妻の話が再び語られている。「十月某日（愛について）」「十月某日（連帯について）」の二節にわたってこの話が取りあげられていること、さらに手を握るとい

う行為をキリストの行為と重ねて解釈を加えていること、その後の「十月某日（一つの詩から）」「十月某日」（引用者注 副題はない。内容は修道女になったひよこの話）にも連帯が繰り返し追求されていることから、いっそう連帯への希求が強まっている様子がうかがえる⁽¹¹⁾。

この『聖書のなかの女性たち』刊行と並行して連載されていたのが、『あなたは夫わたしは妻』（婦人生活）昭36・10・37・8、のちに「結婚」に改題）である。この作品は、楠木憲吉と扇美智子が出会ってから結婚するまでの流れを一本通し、二人の周りの人々の結婚模様をひと月一話ずつ順に紹介して、結婚を通して見えてくる人間の関係の仕方を描いたものである。

三度目の大手術と、『聖書のなかの女性たち』刊行が昭和三十六年十二月であることは先に確認したが、この同じ十二月に「あなたは夫わたしは妻」では、「第三話 妻なればこそ」が発表された。ここに語られる若林和子は裕福な家庭に育ち、日本銀行勤務の男性と婚約していたが、秋の軽井沢で出会った作家志望の青年、若林信男と恋に落ち、婚約を破棄して結婚した女性である。若林の小説は評価されず、和子が酒場に勤めて家計を支えるという苦しい生活を送ることになり、やがて若林も夜更けて帰宅するようになる。和子の両親が家に戻るよう説得するが、和子は「自分も信男を棄てれば、あの氣力のなくなった彼はどうなっていくだろう」と考え、「（やっぱり、あたしがあの人の横にいたくは……）」と「病身の子をよけいにいとおしむ母親に似た気持」を抱き、それを「生きる支え」にしているのである。そして、『道』という古ぼけた伊太利映画」に登場する、「ジェルソミーナとよぶ一人の憐れな女」に自分を重ね、「（結局、すべて妻というものは、こ、う、い、運命じゃないのかしら。すべて女という

ものは、こ、う、い、運命じゃないかしら）／とぼんやり考え」るのである。この、酒場に転落していく点、弱い男を見棄てない点、ジェルソミーナと重ねられる点はまさしく森田ミツと共通する。熊井啓・上総英郎の対談「深い河の向こうへ」の中で、上総氏が遠藤から電話で「三浦朱門と『ジェルソミーナ』（邦題「道」）という映画を見て、どうしてもあの見すてられた女がイエスに見える、そういうヒントから『わたしが棄てた・女』というのを書いた」と言われた話を披露していることから明らかである。育ちも人生のなりゆきも異なるものの、棄てられても愛を貫く女、すべてを運命として受け入れていく女として、若林和子も森田ミツの原型の一翼を担っていると言えよう。

昭和三十七年二月に発表された「第五話 夫婦の損得」に登場する田村サト子は田舎出身で、「背のひくい、眼鼻だちのぱつとしない娘」である。彼女は「ふとい短い足」の持ち主で、「小学生のような稚拙な」字（終章祝婚歌）より）を書く女性である。ほぼ、「わたしが棄てた・女」の森田ミツと重なる人物と言ってよい。サト子は丈夫なだけを取り柄であったが、結婚二年目の春ごろから白血病を発病し、入院することになる。夫の田村幹生は「夫婦とはたがいギブ・アンド・テイクの関係であ」るという結婚観を持っていたため、「サト子のような女をもらったために損をしたという気持」を抱く。そして、病院への見舞いも次第に間遠になっていく。サト子は夫にすまないと言い続けて亡くなるが、その入院中の荷物の中の便箋に書き付けを残していた。病気になるてすまないと思う気持ち、家のことが気がかりだという気持ちが綴られた後、次のように続く。

「（前略）私はあなたになにかしてあげたいけど、なんにもできない。／だから、

私は今の自分の病気が、もしあなたがいつか病気になった時の身代りであるようにいつも神さまや仏さまにおねがいしているのです。あなたがその時、くるしまないように、私にもっと、もっと痛さや苦しみを与えてくださいと祈っているのです。／それが——それしか、私はあなたにしてあげられませんが。でも夫婦なんでもその。それだけでも私はうれしいので……」

文字はそこで消えていた。／便箋をとじて田村はしばらくの間、うつむいていたが彼の泪で溢れてきた眼には便箋の表紙の雪の山の絵もかすんで見えてくるのだった。その泪は後悔と、それから夫婦の情愛を知った悦びとがこもっていたのである。(傍線引用者)

この傍線部分は初版以降、「うつむいていた。結婚生活以来はじめて彼は悔いに似た一種の感情にかられた。「サト子」と彼はひくくつぶやいたのだった。」と改められた。小説としての出来は後者の現行の方だが、初出には田村が「夫婦の情愛を知った」ことがはっきり示されていて、重要である。サト子が夫から見棄てられる状況、それでも自己犠牲による愛を貫き続けた姿勢は森田ミツにそのまま活かされているし、死を以て愛の意味を男に投げかけた点も、森田ミツと重なるからである。鈴木秀子氏が「サト子は知らぬうちに、「アガペの愛」を心にあふれさせていたのである。『わたしが・棄てた・女』のミツのように」⁽¹²⁾と指摘するように、サト子は森田ミツの原型と断言してよいだろう。

翌三月は連載が休みとなり、代わりに「あなたは夫、わたしは妻」余話 夫婦というもの」が掲載された。ここで遠藤は、この連載の目的を、平凡なありきたりの「夫婦を通して結婚生活の本質的なものを掘り下げ」ることとし、「秋の日記」に掲げた白血病の夫の手を握る妻の話を再録す

る。そして、「平凡でありきたりであるだけに」「かえって、せつなさと美しさとをそこに見いだ」し、「多分、我々の誰もがたどりつける夫婦の典型的な愛情をそのままそこに見いだすのです」と付け加えている。この「平凡でありきたり」の繰り返し、「多分、我々の誰もがたどりつける」という断りが、「おバカさん」の頃と異なっているところであろう。ここでは、誰もがができる方法とは言えない、〈特殊〉な愛の形による〈自己聖化〉というよりも、相手の苦しみ共感し、連帯を結ぶという身近な愛の形の追求のほうが顕著だからである。

また、この作品で愛の連帯を追求するにあたり、主人公が女性に代わった点にも留意すべきかと思う。女性を主人公にすることで、その愛を母性的な、すべてを受け入れ、包み込むものとして、〈特殊〉性を排除することがなっているからである。

「あなたは夫わたしは妻」は八月まで連載され、『結婚』と改題されて十月に刊行された。

〔昭和三十八年〕

一月から「わたしが・棄てた・女」が連載される。が、まずはその直前から、八回にわたって連載された「聖書の中の女性」〔毎日新聞夕刊〕昭37・12・10、12・17、12・24、昭38・1・7、1・14、1・23、1・28、2・4について考察したい。

「聖書の中の女性」は、先の「聖書のなかの女性たち」と重なるところが多いのだが、決定的に異なるところが二点ある。一点は既に笠井秋生氏⁽¹³⁾が指摘したように、「(8) 平凡な婦人たちの苦悩を 基督は受けとめた」(昭38・2・4)で、基督の顔を「西欧の画家たちが描いたような美しい、

あまりに清潔な表情」ではなく、女たちが「おびえかくれ」ず、「自分たちの悲哀が無言のうちに伝わる顔、それを受けとめてくれる顔、そして男や女たちすべての苦しみを背負おうとしたために踏絵のそのようにスリへった」顔とした点である。加えて「早く、お前の為すところをなせ。私はお前の苦しみのために存在しているのだ」と、「ユダの苦しみを知っていた」基督を最後に書き、弱者をも愛するキリスト像、すべてを受け入れる母性的キリスト像を強く打ち出した点である。

二点目は、マルタの解釈が変わっている点である。以前の「聖書のなかの女性たち」では、マルタは「自分を正しいと思う」「独善性に陥っていないか」と批判される女性であった。しかし、「聖書の中の女性」では、「(4) 愚痴、基督を閉口さす 愛すべきおばさん、マルタ」(昭38・1・7)のサブタイトルの元、

きつい性格をもち人生に懸命な妹をもった姉は時には妹のしりぬぐいをさせられる。そんな人のよさをもちながら、ブツブツ愚痴をこぼし、そのくせ妹を愛している平凡な女がマルタだ。(中略)／しかし基督はよくよくこのおばさんに好意をもっていたらしい。

と紹介される。批判はなく、マルタにも愛を見ているのである。⁽¹⁴⁾

「聖書のなかの女性たち」と同様の内容を紹介している話にも細部に異なる部分は見える。「(2) 基督の衣にそっと触れた『病魔』と闘う女の指」(昭37・12・17)は「聖書のなかの女性たち」では「病める女」として紹介されていた血漏の女が語られており、一本の指からも基督はこの女の悲しみのすべてを理解した、という同内容となっている。しかし、この女の悲しみを「聖書の中の女性」はさらに掘り下げている。「病いの悲しみ」に

加えて「だけれども愛されぬ苦しみ」を挙げ、基督の理解によって「愛の飢えから救われた」として、より愛の重要性を強調しているのである。

これらの愛——愛すること・愛されることの重さ——の強調は、「スリへり、マメツし」た顔、〈平凡〉でみすばらしい基督の顔の提示と共に、遠藤が追求し続けてきた受け入れる愛というものの真髄を伝えているだろう。こうした流れの中で「わたしが・棄てた・女」は連載を開始するのである。

「聖書の中の女性」「わたしが・棄てた・女」、二つの作品の連載状況を確認すると、絶妙の重なりを見出すことができる。

「わたしが・棄てた・女」は二月号に「ぼくの手記(二)」が発表されるが、ここでは吉岡が強引に連れ込み旅館に誘うものの、ミツの拒絶に会い、小児麻痺の後遺症である肩の痛みに襲われる場面が最後に描かれる。吉岡が惨めな自分をさらけ出したところ、ミツは同情して、彼を慰めるために手の平を返したように「そうだったん……そんなら……そんなら連れてって……さっきのところに」と言うのである。続く三月号は「ぼくの手記(三)」が発表されるが、吉岡を慰めるために嫌々ながら体を与え、愛を与えたミツに引き替え、吉岡は十字架を棄て、ミツを棄てる章である。

その一方で、「聖書の中の女性」は一月二十八日に「(7) 苦痛、わが子とともに 運命を引き受けた女性・マリア」において、「平凡な名でよばれた平凡な娘」マリアが「与えられた運命と使命をしずかに受容する」ことが描かれ、二月四日(前掲(8))には〈平凡〉な婦人たちの苦悩を受けとめた基督の顔、ユダの苦しみも知っていた基督の言葉が書かれる。〈平凡〉な娘が他人の苦しみを受け入れ、愛に生きるさま、及びその愛が報われず裏切られ棄てられる運命を語った部分と時期が合っているのである。

愛は共感し、犠牲を払っても、すべてを受け入れるものという遠藤の主張がここに読み取れる。

森田ミツは川越出身の、「小ぶとり」のどこにでもいる〈平凡〉な娘であった。彼女はスール・山形が絶賛したように、「わざとらしさ」が「少しも見えない」「愛徳の行為」をなし得るといふ特別の資質を備えていたが、愛の形としては「苦しむ人々にすぐ自分を合わせ」、共感し、慰めるという、ごく〈平凡〉で、身近なものであった。武田友寿氏は、⁽¹⁵⁾

ミツはもちろん、〈神〉などというものを信じてはいない。だが彼女は、〈神〉を信じていると自称する人間よりも何倍も高い人間性をそなえている。ミツをそのような人間たらしめたものは（中略）いうまでもなく彼女の苦しみを連帯せずにいられないところなのである。《苦しんでいる者たちを見るのが、何時も耐えられなかった》彼女の〈愛〉をもとめるところなのである。（中略）／氏（引用者注 遠藤周作氏）は徹底的に〈愛〉を思索し、〈愛〉をもとめ、愛の砂漠ともいえる現代に〈愛〉の回復を希った人なのである。そしてその氏の希う〈愛〉こそ、人間を墮落から救い、人間を低い位置からより高い世界へと導く聖化の機縁であることを氏は疑わなかったのである。

と述べている。今までの数々の作品の流れを考慮しても首肯できる意見である。つまり、ミツは「聖女」だから「愛徳の行為」を為せたわけではなく、「愛徳の行為」を為せたから「聖女」なのである。「わたしが・棄てた・女」は、「道」のジュルソミーナから構想を得て書かれたものであるが、森田ミツの〈自己聖化〉という結末を書くことが第一の目標ではなかったのではないか。〈平凡〉な女の、誰にでも同調して愛を注ぐという愛のプロセス、連帯の大切さを訴えた作品で、そうしたプロセスの結果として

〈自己聖化〉という変容が見えてくるのではないか。「留学時代もずっとあたたためて」いたという女性のありかた、いくつもの作品を描くことでたどりついた「愛」の形を体現する女性像、それを持っているからこそ、森田ミツは作者にとって「理想の女性」なのである。

四

「わたしが・棄てた・女」の〈惑星〉と言える作品は、森田ミツという人物に照らしてみるなら、「集団就職」と『結婚』（特に「第三話妻なればこそ」と「第五話夫婦の損得」）であろう。ただし、この二作とて降って湧いたように生まれてきたのではない。いくつもの作品から流れ込むものを熟成させているのである。

作者、遠藤の健康状態と深く連動し、見棄てずについて行くという形で愛を示し、鮮やかに〈自己聖化〉を遂げる男性主人公から、共感し、慰め、すべてを受け入れるというより身近な愛を示す女性主人公へと、愛の実現の仕方も変わっている。

「わたしが・棄てた・女」は「人間が・棄てた・イエス」⁽¹⁶⁾をダブルイメージとして持つことは、今やよく知られたことであるが、「おバカさん」のガストンに重ねられたイエスのイメージと、森田ミツに重ねられたイエスのイメージでは、ミツに重ねられたほうがより母性的な印象が強調されているようである。もちろん、ミツが女性だからという要素も大きい。ただ、遠藤はそういう主人公を選んで書かなければならなかったのではないか。「わたしが・棄てた・女」連載時には並行して『哀歌』に収められていく作品群も発表されていた。母なるイエス、許して受け入れるイエスが

「沈黙」に描かれるまで、あとわずかのところである。

注

- (1) 『哀歌』(昭40・10、講談社)。引用は講談社文芸文庫(昭63・7)による。
- (2) 新連載小説予告「人気作家の野心作登場! 長篇小説さようなら」(「主婦の友」46・12号、昭37・12)。
- (3) 『追悼保存版 遠藤周作の世界』(平9・9、朝日出版社)
- (4) 「読者のみなさんへ」(「主婦の友」47・5号、昭38・5)
- (5) この森田ミツが繰り返し登場することについては、拙稿「キャラクターの円環——森田ミツをめぐる——」(『遠藤周作 挑発する作家』平20・10、至文堂)にて考察している。
- (6) 遠藤はこの作品の原型として、「フランスにおける異国の学生たち」(「群像」昭26・9、のち「フォンスの井戸」に改題)を書き、内部処罰を取りあげている。
- (7) 『遠藤周作のすべて』(朝文社、平3・4)
- (8) もちろん新聞の連載と雑誌の発表では、それぞれの回の脱稿にズレが生じることは承知しているが、それでも近接していることに変わりはないのである。
- (9) 初版以降、「(ガストンは、生きている。彼はまた青い遠い国から、この人間の悲しみを背負うためにノコノコやってくるだろう)」と改められた。
- (10) 『聖書のなかの女性たち』(昭47・11、講談社文庫)
- (11) ただし、「(一つの詩から)の次に副題なしの「十月某日」として、「おバカさん」の〈自己聖化〉を語った文章が挟まれている。
- (12) 「解説」(「結婚」昭56・3、講談社文庫)
- (13) 『遠藤周作論』(昭62・11、双文社)
- (14) なお、昭和五十八年十一月に刊行された『イエスに選った女たち』では、

このマルタ登場場面を、まずはイエスがマルタをなだめる「謹厳な聖書のなかで稀有のユーモアある場面」と紹介し、「もし右のような珍解釈がいけないと言ふなら」「これはイエスの手きびしい女性批判だと」考えてはどうかとして、「あまりに現実的」で「他人の心や他の世界にたいする関心と想像力」も「愛も持」たない女性の象徴だと解く。けれども、最後は「しかし私はイエスがマリアとマルタ姉妹の喧嘩に弱り果てマルタをしずめようとして、あの言葉を言ったとどうしても思えてならぬのですが……。」と締めくくる。遠藤のなかでも解釈に揺れの生じた逸話ではあったようだ。

- (15) 「解説『わたしが・棄てた・女』」(昭47・12、講談社文庫)
- (16) 遠藤周作・加賀乙彦対談「最新作『深い河』——魂の問題——」(「国文学」38・10号、平5・9)。

テキスト 引用は原則として単行本刊行以降のものに拠り、改稿が見られる場合には初出も示し、断りを入れた。なお、ルビは省略した。

○「わたしが・棄てた・女」(『遠藤周作文学全集』5、平11・9、新潮社)

以下引用順

- 「白い人」(『遠藤周作文学全集』6、平11・10、新潮社)
- 「黄色い人」(『遠藤周作文学全集』6、平11・10、新潮社)
- 「青い小さな葡萄」(『遠藤周作文学全集』1、平11・4、新潮社)
- 「聖書のなかの女性たち」(『聖書のなかの女性たち』昭47・11、講談社文庫)
- 「パロディ」(『月光のドミナ』昭47・3、新潮文庫)
- 「海と毒薬」(『遠藤周作文学全集』1、平11・4、新潮社)
- 「挿話」(「結婚」昭56・3、講談社文庫、のちに「恋人とよばせて」に改題)
- 「火山」(『遠藤周作文学全集』1、平11・4、新潮社)
- 「最後の殉教者」(『遠藤周作文学全集』6、平11・10、新潮社)
- 「おバカさん」(『遠藤周作文学全集』5、平11・9、新潮社)

- 「ヘチマくん」(『ヘチマくん』昭38・8、角川文庫)
- 「集団就職」(『結婚』昭56・3、講談社文庫)
- 「男と猿と」(『最後の殉教者』昭59・12、講談社文庫)
- 「葡萄」(『月光のドミナ』昭47・3、新潮文庫)
- 「あなたは夫わたしは妻」(『結婚』昭56・3、講談社文庫、のちに「結婚」に改題)
- 「聖書の中の女性」(『毎日新聞夕刊』昭37・12・10(38・2・4))
- 「イエスに選った女たち」(『イエスに選った女たち』平2・12、講談社文庫)

参考文献

- 山根道公「遠藤周作年譜・著作目録」(『遠藤周作その人生と『沈黙』の真実』平17・3、朝文社)

(ふえき みか 日本語日本文学科)